



TITLE:

会議 図書館商議会専門委員会 第
2,3回

AUTHOR(S):

CITATION:

会議 図書館商議会専門委員会 第2,3回. 静脩 1970, 6(6): 2-3

ISSUE DATE:

1970-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/36576>

RIGHT:

図書館職員による「大学図書館改革問題懇談会」スタート

京都大学の図書館問題を検討するために、昨年末教官をメンバーとした「商議会専門委員会」が発足したが、これにつづいて2月13日（金）に、図書館職員による「大学図書館改革問題懇談会」がスタートした。3月20日（金）まで4回の会議が重ねられているが、だいたいつぎのようなことがきまった。

〔目的〕 新しい大学の図書館がいかにあるべきかを考え、改革案を作成し、その実現に努力する。

〔構成員〕 1. 京都大学の図書館職員および関心のあるひと。

2. 連絡員一会議の内容を部局に伝達し、また館員の意見をなるべくまとめ、会に反映させる。

人数 17名（各学部、教養、人研、化研、経研、数研、原子炉より、それぞれ1名、図書館より2名）

3. 世話人一会の進行・運営にあたる。

人数 7名 岸本年之（法） 高橋和子（教養） 竹内隆恭（農）
坂東 慧（数研） 広庭基介（文） 古原雅夫（医） 小国健一（図、仮）

〔会議の開催日〕 第1・3金曜日（月2回）

ロシア語学術雑誌（化学系）英訳版の共同購入計画すすむ

英・仏・独語逐号翻訳誌 Cover to cover translations として知られるロシア語雑誌翻訳版は、昨年8月当時のリストですでに200誌近くに達している。本館にも備付け希望があるが、購入のあい路は、その種類の多いこと、単価が高く（1種平均年間5～6万円見当）、かつ毎年の継続支出となることなど、おもに予算的裏付けの乏しいことが偽りない理由でもあった。

そこで、宍戸館長の発案により、①購入の手掛りとして範囲を化学系に限定する。②化学系各教室（および図書館）の共同負担とする（各講座・教室の年間負担額は1万円）、③希望の翻訳版は本館に一括備え付けるとの原則で、学内の化学系教室・講座代表約20名による化学系図書懇談会を昨年末発足させ、最近（2月17日）開かれた第3回会合で18種の化学系英訳版の購入希望をとりまとめた。

今後、購入・契約済みのものとの調整、支払など事務的には複雑な問題を藏しているが、一つの新しい試みとして注目されよう。

京都大学学術雑誌総合目録・補遺1970年版刊行さる

これは自然科学と人文科学の両篇に分かれ、それぞれ和文と欧文とを含んでいる。既刊の各総合目録諸篇のサプリメントとなるもので、その後の新規備付雑誌を網羅している。今後、この補遺版は逐年出される予定である。

一 会 議

図書館商議会専門委員会 第2回：昭和45年1月21日（水）、第3回：2月18日（水）

〔第2回〕 議題：部局図書委員会の諸問題について

前回議事報告の後、図書館商議会と部局図書委員会との性格的・機構的相似点について、商議会・委員会は評議会・教授会の Sub-Committee または総長・部局長の諮問機関であるかどうか、また全学的な図書館体系のビジョンを確立するとともに図書館（室）の機能を整

備充実させることが目下の急務でないかなどが討議された。

〔第3回〕議題：全学的な図書館組織のあり方について

前回議事報告の後、図書館人事・予算、図書の管理・運営の諸問題について、分館問題における建面積と予算の関係、全学的ビジョンの明確化、本館の3階増築、文献複写サービスの迅速化などが討議された。なお館長ならびに整理課長から図書専門職員による「大学図書館改革問題懇談会」の発足が報告・説明された。

近畿地区国公立大学図書館協議会の図書館業務機械化委員会

この委員会は京大が主査館となって昭和43年より業務の機械化について検討を進めてきたが、44年度は文部省が予算化を準備中であった高性能 PCS（パンチカード・システム—IBM モデル20）を中心に検討を行なった。

これは主に発注・受入と貸出返却および雑誌管理の業務にいかに関機を導入するか、また仕事の流れは現在に比較してどのように改善され、効率を上げ得るか等をフローチャート化して具体的に検討しており、近く報告がまとめられる予定である。

今のところこの PCS 導入にはなお問題点（前提となる業務の集中や標準化、システム自体の問題等）もあり、また予算措置を伴うこともあって早急には実現できないとしても、業務量の増大に対処してサービスの迅速化を図る等大学図書館の機能を高めるために機械化を推進する必要がある、本館としてもとりあえず部分的適用についての具体的な可能性を検討している。

一言・ふたこと

今の私にとって、図書室は、身分や権威をひけらかしはしないけれど、嘘や曖昧さに対しては極めて厳格な教師のいる所であり、時には、暫らく遠ざかっていると無性に逢いたくなる片想いの恋人に似た場所でもある。そして、ここ1年半ばかり、所属する研究室の図書の管理を任されている立場から見ると、それが研究と教育の中核施設の一つでありながら、今の政府の高等教育と科学技術に対する施策の貧困と歪みの縮図であるように思える。理学部化学科の図書室の場合、50周年記念事業で図書の充実を計られたとかで、雑誌のバックナンバーは京大の他教室と比べてもずいぶんよく揃っている。けれどもその少なくない図書を管理して下さっている職員は僅かに2人であり、しかもその1人は定員外職員と聞いているし、他の1人も図書室の専任ではない。絶対的に少ない職員の影響は、われわれ利用者の共同財産と

理学部化学教室
 図書室に想う

としての自覚の欠如にも原因があるのだろうが、100冊に近い単行本の行方不明という結果となり、大きな不便を蒙っているし、図書室の広さは、書庫とコピー室を合わせて実験室7スパン分であって、完全開架式の書棚と同居の閲覧机では深い思考は望むべくもない。マスコミでも宣伝されている情報化時代を迎え、飛躍的に増大しつつある情報量に押し潰されないためにも、その充実とともに大学の図書の運営は、全学的あるいは全国的な文献情報のオンライン化を含めて、抜本的な改革を期待したいが、これも早急の実現が困難となれば、せめて情報化時代の趨勢に流れ、深い思索の習慣と時間を失ない勝ちの院生、学生のために、図書室がまさに静脩の場を与えてくれることを願いたい。

（博士課程2回生 山岡 隆）